

第40回岐阜外科集談会抄録

日時・昭和41年2月9日

場所・岐阜大学医学部丹羽講堂

1. 両側慢性硬膜下血腫例の検討

岐大 第2外科 上田 茂夫

過去8年半に6例の両側慢性硬膜下血腫を経験した。これは全慢性硬膜下血腫49例の11.1%に相当する。全例男性で24才の1例を除き何れも55才以上であった。又頭部外傷の既往を有していたが、症状発現までの期間は平均59日で、頭痛を初発症状としていた。神経症状として特長的なものはなく、一側性の場合に特長的であった運動麻痺も2例に認めただけであった。只脳圧亢進所見は全例にみられ、髄液圧上昇、鬱血乳頭を認めた。診断は頸動脈写によつたが、この際無血管領域の存在のみならず前大脳動脈の偏位の有無、程度に十分な注意を払うべきである。1例を除き穿頭内容除去、または開頭血腫被膜切除を行ない何れも良好な結果が得られた。1例は運動失調及び聴力障害から聴神経腫瘍と診断、開頭時偶然血腫を発見したもので被膜切除を行なつたが、他側を見落した為に術後死亡した。

2. 最近の教室の血清肝炎について

岐大 第1外科 和田 英一

最近7年間の教室における輸血による手術後血清肝炎の症例について統計的な観察を試みると共に輸血の種類との関係、特に所謂新鮮血輸血について述べ、また血清肝炎の発生及び経過について経時的な観察をした。肝炎の病型を単純型(A型)、遷延型(B型)、再燃型(C型)の3型に分類し夫々の特徴、発生率、経過、予後及び病例について若干の知見を述べた。

3. 保存血輸血に関する研究

岐大 第1外科 渡辺 裕・○村瀬恭一
伊藤 達次・今尾 恒裕・三浦 佳久
原 節夫・種田 耕三

ACD 血液保存による経日的変化を健康者3例、売血2例について採血後3週間検索を試みた。Ht 値は2週以後次第に増量、pHは24時間で7.15、2週後には6.72、血糖は第1日で135mg/dl で次第に減少、乳酸は第1日5~20mg/dl で3週後には120mg/dl、 α -ケトグルタル酸は第1日より軽度の上昇を示すに過ぎない

が、ビルビン酸は3週後には第1日の3倍値4.2mg/dlを示し、Naは保存3~8日で一過性に増加し、以後次第に減少、Kは1~3日迄は正常範囲内で、経日と共に極度に上昇し3週後には16mEq/Lであった。

また犬にACDそれぞれ2週間及び3週間保存血を大量輸血し、その保存血及び受血犬の血液、血圧また各種臓器の組織学的変化について検索を試みた成績について述べた。

4. 輪状瘻の一例

岐大 第2外科 上田 茂夫

生後8日目の女兒、生後数時間目から頻回の嘔吐、体重減少を来し入院。入院時体重2500gm。脱水状態著明で、腹部特に上腹部に限局性の膨満を認め、それに一致して蠕動不穏をみた。腫瘍はふれない。腹部レ線写真で胃及び12指腸上部にガス像を認め、所謂典型的な Souble bubble sign を呈していた。それ以下の腸管ガス像はみとめなかつた。先天性12指腸閉塞と診断し手術を行なつた。胃及び12指腸は非常に拡張していたが、丁度12指腸下行部の略々中央部に索状となつた瘻組織により輪状にしめつけられ閉塞していた。輪状瘻による12指腸閉塞と判明、結腸後12指腸空腸側に吻合を行なつた。尚閉塞はファーター氏乳頭より口側であった。術後経過順調で50日現在体重増加も良好である。教室に於ける12指腸閉塞例(先天性)は7例であるが輪状瘻によるのは本例のみである。

5. 新生児穿乳性腹膜炎の1例

岐大 第2外科 櫻木 良友

我々は最近、新生児に稀れに腸穿孔性腹膜炎の1例を経験したので報告した。

〔症例〕生後10日目の男子、妊娠、分娩経過に異常なく、生下時体重は3kg、〔症例〕誕生直後より腹部膨満、胆汁様嘔吐、胎便排出遅延を来し、2日目の浣腸により胎便排出を見る。4日目に小児科へ入院。腹部単純レ線像では小腸、結腸全体の拡大せるガス像を認む、7日目の注腸像で廻盲部狭窄が疑われた。10日目に本科へ入院(入院時所見)嘔吐、呼吸促進、チアノーゼあり。腹部は膨満し、鼓張状、腸雑音は微弱な

るも腹壁は軟、白血球数、11,000、(手術所見) 廻盲部の異常なく、前腹壁に癒着せる廻腸上部の Kink Ileus を認め、同部に2ヵ所の腸穿孔を認む。腸切除、端々吻合を施行。Kink Ileus の結果、腸内圧上昇により腸穿孔を生じたものと考えられた。尚、患者は術後8日目に縫合不全で死亡した。

6. 脂肪性胸腺腫の1手術

岐大 第1外科 伊藤 達次
岐阜市民病院放射線科 飯沼 順二
岐大放射線科 金武 喜子

17才女、昨年5月学校の集団検診で、レ線撮影により胸部に異常陰影があるといわれた。自覚症状はない。体格中等度栄養良好、胸部は濁音界は上縁第3肋骨、右側は胸骨より右外側1横指、左側は左鎖骨中央線より3横指外側。聴診により濁音界に一致して、呼吸雑音が減弱、レ線検査では、単純像で中央陰影は両側に強く拡大し、その辺縁は平滑、鮮明、肺紋理は正常。ACG、気管支造影、縦隔気体造影検査等により、胸腺に由来する疾患と診断し、昭和40年12月7日摘出手術を施行。左前胸部第4肋間で開胸。腫瘍は胸腺の部位に存在、形はH型、重さ300g、大きさ左16×9.5×3cm、右14×7.5×2cm。表面薄い被膜に覆われ、黄色、軟い。組織学的に脂肪性胸腺腫。術後経過甚だ良く、3週間で退院。

7. 所謂吻合病の1例

岐大 第1外科 渡辺 祥

患者は46才男子。昭和39年5月一医師により急性腹症と診断されて開腹、人工肛門造設術施行。第7病日イレウスにて再開腹、腸切除を行わず空腸横行結腸側々吻合施行。その後愁訴なく昭和39年9月人工肛門の閉鎖を希望して来院。人工肛門閉鎖のみ施行、第22病日退院。昭和40年2月腹部膨満、下痢及び下肢の浮腫を来し再度来院。当時栄養衰え、皮膚乾燥貧血様、腹部膨満し局所的膨隆及び蠕動不穩を認める。赤血球360万、白血球9800、Hb量75% (ゼーリー)、血清蛋白5.8%、コレステロール115mg/dl、糞便色淡下痢様、潜血虫卵陰性。X線検査にて多量のガス像、水平面像あり。I¹³¹ トライオレイン試験にて消化吸收障害を認める。昭和41年1月開腹、トライツ氏靱帯より1米巾約4横指の空腸横行結腸吻合部を切断分離した。術後愁訴消失し諸検査成績の好転を認めた。

8. 我々の経験せる胆嚢癌症例について (抄録)

岐阜市民病院外科 安江 幸洋・加賀谷 種

我々は最近4年間に胆嚢癌による胆嚢切除術を5例施行した。男性2例、女性3例で年齢は43才より70才である。2例は胆石の既往があり4例は手術時胆石を認めた。腫瘍は3例が瀰漫性増殖型、1例が結節型、1例が乳頭様増殖型で病理組織学的に2例が乳嘴状腺癌、3例が単純性腺癌である。4例に転移を認めた。尚この間に手術を行なった胆道系疾患は58例で8.62%が胆嚢癌による胆嚢切除例である。予後に関しては1例が術後3年2ヵ月で尚再発を見ず、又1例が術後1ヵ月で生存中であるが3例は術後夫々4ヵ月、6ヵ月、8ヵ月で死亡した。

9. 陰茎異物の1

岐阜県立岐阜病院泌尿器科 石山 勝蔵

陰茎増大を目的として注入した陰茎内補填材料(オルガノーゲン10ml)が異物として作用し、性生活に支障を来した32才の症例について報告した。誤つた考えによつて行なわれた陰茎増大が如何に有害無益であるかを述べた。

補填物は有機溶媒に溶ける脂肪様物質で、パラフィン様の外観を呈し、注入後6年を経過したもので、尚注入部位に異物反応を呈していた。

10. 膀胱異物の3例

岐阜泌尿科 田村 公一

以下の3例はいづれも手淫の際に自ら挿入したものである。

症例I 17才♂(高校三年)昭和39年11月18日

来院10日前にアルミ製シャープペンシルケース(6×60mm)を挿入、当時は自覚症状なし、2日前に長さ125cmのビニール電線を挿入。血尿排尿痛を訴えて来院、膀胱高位切開術にて両者を摘出、精神的には異常を認めず。

症例II 37才♂(公務員)昭和40年11月22日

来院前日直径8mmのゴム管を尿道に挿入、一部は自分が切つたが残りが出ず残尿感を訴えて来院、膀胱鏡にてゴム管確認し経尿道的に摘除、摘除ゴム管は長さ22cm

症例III 17才♂(工員)昭和40年11月24日

来院5日前に径1.5mmのビニーコードを挿入、以来

血尿、排尿痛、残尿感等を訴えて来院経尿道的に摘除、コードの長さ67cm

以上3例いづれも精神的には特記すべき所見はない。

追加

膀胱異物の2例

県立岐阜病院泌尿器科 石山 勝藏

1) 入れたもの、21才、会社の女事務員

4日前入れた、ヘアーピン。異物用膀胱鏡で摘出。既に塩類の附着がみられた。

2) 入れられたもの、65才の男。

前立腺肥大症で女性ホルモン療法を受けていた。5日前、性交機会があつたが、勃起不能であつたので、相手の芸者が入れたという5cmのゴム管。前立腺摘出

術の際、共に摘出。

11. 尿管異所開口の症例

岐阜大 泌尿器科 大谷 文茂

患者は4才2ヵ月の女性でおむつを取つても、正常に1日数回の排尿があるのにもかかわらず下着が尿で汚れている。膀胱鏡検査、排泄性腎盂撮影、腔造影等の検査により、左尿管腔開口症を合併せる左腎形成不全症と診断し、左腎摘出術を施行した。術後経過は良好で、腔よりの尿失禁も止まり退院した。

追加

県立岐阜病院泌尿器科 石山 勝藏

4才7ヵ月の尿管異所開口の症例につきレ線フィルムを供覧した。近く手術の予定。